

フランシス・ベイコン著『エッセイ』に現れる名詞句の構造と分布の研究

西岡啓治

岡山理科大学理学部応用物理学科

(2011年9月30日受付、2011年11月7日受理)

0. はじめに——名詞句研究の目的

本稿の目的は、*Essays* に現れる名詞句 (Noun Phrase, 以下 NP と表示) の構造と Syntax の関係を調べることである。Francis Bacon の *Essays* は、“The *Essays*, in various editions from 1597 to 1625, started as assemblages of aphorisms, held together only by a common subject, a chaos of bright ideas of a broadly Machiavellian tone.” (Drabble ed. s.v. “Bacon, Francis”) とされるように “aphorism” (格言) 的なことばが多く書かれている。そのためにその文体は “Bacon’s gnomic style” (Ward, Sir A. W. and A. R. Waller eds. Vol. IV, 348) と評される。本稿では *Essays* の文に用いられた名詞句に注目し、その構造と節中での文法的分布状況を調べ格言的と評される文体との関係の言語学的分析を試みる。

1. 観察対象の名詞句

1.1 節 (Clause) 中での文法的関係と NP の分布

NP は節 (Clause) を構成する要素のひとつである。NP にはその要素として中心となる noun、すなわち Head noun が存在しその Head noun だけの場合も一つの NP とカウントする。それ以外に Head noun をその前後から修飾する語句を伴う場合も NP である。NP は次に見るように節の中にいくつも現れる。例えば “Some students who must take the final examination will be working late in their rooms.” というセンテンスを取り上げそれをツリーで示すと Fig. 1.1 のようになる。この例文は Quirk et. al. (41-43) に多少の変更を加えたものでその結果ツリーにも変更がある： (Fig.1.1)

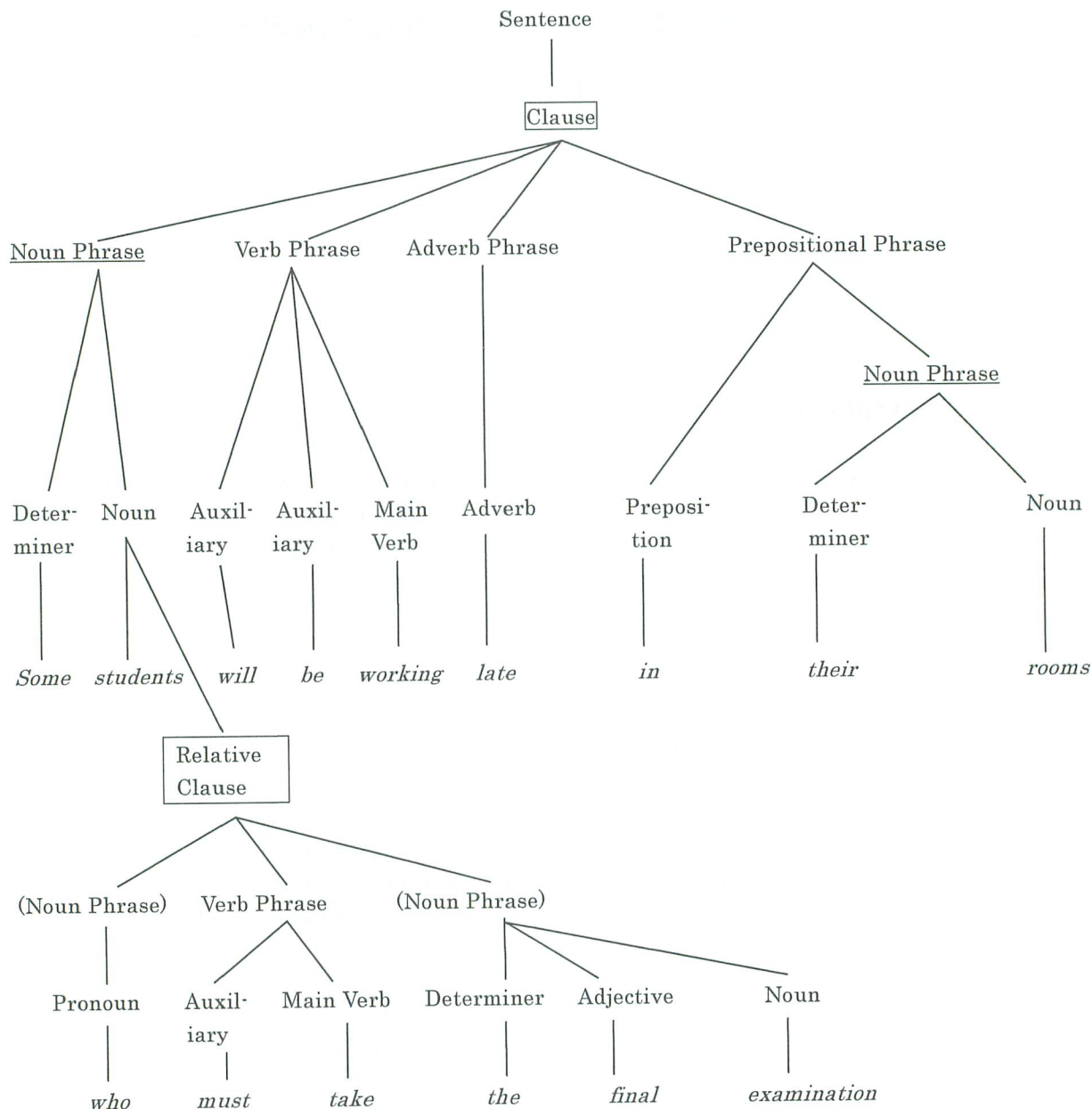
このように文法を階層関係で示せば、NP は節 (Clause) を構成する動詞句、副詞句、前置詞句と並ぶ一つの句である。このツリーには4つの NP が含まれるが以下の研究対象の NP はツリーの上にある下線を施した NP である。ツリーの下部にある () 付きの2つの NP は上部の NP に含まれたものなのでそれは本研究の NP としてはカウントしない。したがって対象とする NP は [[Some students who must take the final examination]] will be working late in [[their rooms]]. の [[]] で示した2つである。以下で触れるように前者は Complex NP、後者は Simple NP の例である。

1.2 節中での機能

次に NP の節中での機能 (function) —主語(S)、動詞(V)、目的語(O)、補語(C)、副詞類(A)—を考えると、上例の NP は S (Some students . . . examination) および A (in their rooms) に属する。それ以外にも NP は次の例文に [[]] で示すように O としても (例: I like [[sports]]. / My daughter gave me [[this sweater]].) また C としても (例: My father was [[a coal miner]]. / We call this building [[Pentagon]].) 用いられる。したがって NP は V 以外ではどの機能にもその構成要素になりうる。

2. NP の構造

Quirk et. al. (CGEL: 1238-39) によれば、NP は (A) Head (B) Determinative (C) The Premodification (D) The Postmodification の4つの部分から成る。その説明を要約、追加して引用する (Fig. 1.1 の後に続く):



(Fig.1.1)

- (A) Head とは NP の主要語のことで前後に修飾語を伴い、文の他の構成素—例えば V を統率する。すなわち be 動詞の種類が変わるなどである。斜字体の語が Head で[[]]が NP を示す：
 [[The tall *girl* standing in the corner]] is my sister.
 I saw the tall girl in [[the *corner* which was full of people]].
- (B) Determinative とは Head の前にあってその主要語を何らかの形で限定する働きをする語で
 (a) predeterminers (b) central determiners (c) postdeterminers の 3 種類があり、これらが逆順になることはない。つまり pre-, central-, post- の順であり、”all those fine musicians”とは言えるが ”those all fine musician”とは言えない：

(a) predeterminers……*all, both, double* など :

all the furniture *both* those musicians

(b) central determiners…… *this, some* など :

some new office furniture *all those* fine musicians

(c) postdeterminers……*many, few, several* など :

the *many* new offices the *few* survivors

(C) Premodification とは determinatives 以外の語句で Head の前に来る特に形容詞と名詞である :

some *expensive* furniture some *very expensive office* furniture

(D) Postmodification とは Head のあとに置かれて Head を修飾する語句、節である :

the car *outside the station* the car *standing outside the station* the car *that stood outside the station*

次の3で Aarts は Determinative という用語の代わりに determiners という語を使っているが指示するものは同じである。

3. NP を用いた文体研究

Aarts (1971: 281)は“On the Distribution of Noun-phrase Types in English Clause-structure”で、現代英語からの約 17,000 語のコーパスを用いてその NP を“‘light’ noun phrase”と“‘heavy’ noun phrase”に二分し、それらが節中でどのように出現するかを調査している。現代英語全般の特徴をとらえるためにそのコーパスは性格の異なる文書、すなわち (1)light fiction (2) scientific writing (3) informal speech (4) formal spoken and written English の 4 分野から NP を集めている。そして節中で‘light’ NP 及び‘heavy’ NP が (a) Subject (b) Direct object (c) Prepositional adjunct (d) Indirect object (e) Nominal part of predicate (f) Predicative adjunct のどの位置に出現するかという分布状況を分析しそれらの位置での NP の出現比率を計算する。その分析から主語位置には軽い構造の NP—“‘light’ items”—が、そして主語以外の位置には重い構造の NP—“‘heavy’ items”—が用いられる傾向が強いと結論づけている。Aarts の使用する‘light’ item と‘heavy’ items という用語はそれぞれ Quirk et. al.では Simple NP と Complex NP に相当する。Aarts(1971: 281-82) は次のように区別している :

By ‘light’ items we shall here understand: (1) pronouns, (2) names, (3) nouns, neither pre- nor postmodified, (4) nouns, premodified by determiners only. By ‘heavy’ items we shall understand:

(a) All other pre-modified noun-phrases, i.e. those premodified by:

(1) adjective(s), (2) genitive, (3) noun, (4) adjective + nouns, (5) genitive + noun.

(b) All postmodified noun-phrases, i.e. those postmodified by:

(1) prepositional phrase(s), (2) prepositional phrase(s) + clause, (3) prepositional phrase + non-finite clause, (4) non-finite clause, (5) relative clause.

Aarts は具体例を示していないが、分類用語に用いられた‘light’と‘heavy’ということばが示すように、‘light’ items は代名詞、名前、そして名詞でも冠詞を伴うだけのものというふうに一見して 1～2 語からなる短い NP を指す。それに対して‘heavy’ items は Head noun の前後に修飾語句を伴い、関係詞節を伴う場合もあるように一見して長目の NP である。

Quirk et. al. (1985) はその Aarts の NP 研究について、NP が談話の style を知る指標になることを次のように評価している :

Even such coarse-grained comparisons as these make clear how sensitive is the noun phrase

as an index of style and how responsive it can be to the basic purpose and subject matter in varying types of discourse.

4. *Essays* の NP データ作成

4.1 コーパス

今回対象としたエッセイは 58 編の中の次の 8 つのエッセイである。エッセイ番号、題名、題名の日本語訳、そして語数を示す。なお語数には Bacon の引用するラテン語の数も含まれる。日本語訳は渡辺義雄(1983)による(以後の引用でも同じ) :

IX. Of Envy (嫉妬について)	1645
X. Of Love (恋愛について)	623
XV. Of Seditious And Troubles (反乱と騒動について)	2255
XXV. Of Dispatch (敏速について)	597
XXX. Of Regiment of Health (養生法について)	591
XLII. Of Youth and Age (青年と老年について)	631
XLVII. Of Negotiating (交渉について)	510
L. Of Studies (学問について)	491

このコーパスの総語数は 7343 語である。

4.2 分析表

Quirk et. al. (1985: 1351) は Aarts の資料をもとに Simple NP と Complex NP が主語(subject)位置に出現しているか、それともそれ以外の(not subject)位置に出現しているかを仕分けし、出現頻度を示す表を作成している。Quirk et. al.の表とそれのもとになったと思われる Aarts (1971: 282-83) の表を参考にして私の場合は次のような表を使用する :

	Simple Noun Phrase			Complex Noun Phrase		
	All simple NPs	Nouns	Names and pronouns	All complex NPs	Premodified complex NP	Multiple modification
subject						
not subject						

(Table 4.2)

4.3 *Essays* の NP 分析

Essays に出現する NP を Simple NP と Complex NP とに仕分けし、それぞれの下位区分として Simple NP には Nouns および Names and pronouns を、Complex NP には Premodified complex NP と Multiple modification を設けた (Table 4.2)。Quirk et. al.にも Aarts にも詳しい下位区分が設けられておらず NP を仕分けするとき行き先のない NP が出てくるので、この表では下位区分として Nouns と Premodified complex NP を設けた。Premodified complex NP という用語は Aarts の定義 (上記 3) に従って仕分けをする都合上設けたものである。すなわち Aarts の 'heavy' items の定義のなかで(a)に属するものが Premodified complex NP、(b)に属するものが Multiple modification である。

ここでエッセイ XIII "Of Nobility" (貴族について) の冒頭箇所を引いて具体的な仕分けと手順を示す。下線は NP を明示するため、また太字は NP の Head を示すために私が付したものである。なお斜体はテキストのものである (以下の引用でも同様) :

We will speake of *Nobility*, first as a *Portion* of an *Estate*; Then as a *Condition* of *Particular Persons*. A *Monarchy*, where there is no *Nobility* at all, is ever a pure, and absolute *Tyranny*; As *that* of the

Turkes. For Nobility attempers Sovereignty, and draws the Eyes of the People, somewhat aside from the Line Royall. (p.41)

貴族については、まず国家の一部として、次に個人の身分として述べることにしよう。
 貴族が全く存在しない君主国は、トルコ人のそれのように、つねに純粋な絶対的専制である。貴族は主権を和らげ、国民の目を歴代の王からいくらかそらすからである。(p.66)

上記の表の項目に従いこれらの NP の分布状況を具体的に示せば次のようになる：

	Simple Noun Phrase			Complex Noun Phrase		
	All simple NPs	Nouns	Names and pronouns	All complex NPs	Premodified complex NP	Multiple modification
subject	2	Nobility (第 3 行目)	We	2		A Monarchy, where there is no Nobility at all/ that of the Turkes
not subject	2	Nobility(第 1 行目)/ Sovereignty		5	A pure, and absolute Tyranny/ The Line Royall	a Portion of an Estate/ a Condition of Particular Persons/ the Eyes of the People

(Table 4.3)

仕分けではたとえば **that of the Turkes** のように省略された動詞を考えて subject に振り分けたり、**A Monarchy, where there is no Nobility at all,**のように現代英語の場合なら where 以下はコンマがあるのだから非制限用法と考えて一つの副詞句とみなすかもしれないが、当時の句用法は Kiernan (cxiv)の説明によれば当時の“printing-house style”によるもので、Bacon の自筆原稿が残っていない現在では解釈は読者の判断に頼らざるを得ない。また、The Line Royall は“Premodified”という定義には当てはまらないが“Multiple modification”にも当たらないので意味的な判断から Premodified complex NP に分類した。仕分けには従って私の解釈が多く含まれる。

5. NP の分布状況

このような方法で上述の 8 つのエッセイを分析したものが次の表である。

<i>Essays</i>		Total	Simple Noun Phrase			Complex Noun Phrase		
			All simple NPs	Nouns	Names and pronouns	All complex NPs	Premodified complex NP	Multiple modification
Whole sample	subject	644	439	171	268	205	70	135
	%	43.4	29.6	11.5	18.1	13.8	4.7	9.1
	not subject	839	442	312	130	397	187	210
	%	56.6	29.8	21.0	8.8	26.8	12.6	14.2
	total	1483	881	483	398	602	257	345
	%	100	59.4	32.6	26.8	40.6	17.3	23.3

(Table 5)

6. Aarts との比較

NP の出現率をこの表だけで判断することは難しいので Aarts のものと比べながら検討してみたい。Aarts は前述(3)のように現代英語が様々な分野で用いられる時の NP の出現率を調べたものである。Aarts (1971: 289) の表を私の表の形式に合わせて再計算して載せると次のようになる :

Aarts		Total	Simple Noun Phrase			Complex Noun Phrase		
			All simple NPs	Nouns	Names and pronouns	All complex NPs	Premodified complex NP	Multiple modification
Whole sample	subject	7898	6749	928	5821	1149	693	456
	%	46.6	39.8	5.5	34.3	6.8	4.1	2.7
	not subject	9063	4753	2560	2193	4310	1211	3099
	%	53.4	28.0	15.1	12.9	25.4	7.1	18.3
	%	100	67.8	20.6	47.2	32.2	11.2	21.0

(Table 6a)

両者 (Table 5 と Table 6a) を比較しやすくするためにパーセンテージのみの表を作ると次のようになる :

<i>Essays</i> & Aarts		Total	Simple Noun Phrase			Complex Noun Phrase		
			All simple NPs	Nouns	Names and pronouns	All complex NPs	Premodified complex NP	Multiple modification
	subject							
Whole sample	Bacon%	43.4	29.6	11.5	18.1	13.8	4.7	9.1
	Aarts%	46.6	39.8	5.5	34.3	6.8	4.1	2.7
	not subject							
	Bacon%	56.6	30.5	21.0	8.8	26.8	12.6	14.2
	Aarts%	53.4	28.0	15.1	12.9	25.4	7.1	18.3

(Table 6b)

7. Aarts と比較した NP の分布状況

Aarts のコーパスは 16,961 語と大きいので現代英語での標準的な NP の出現率と考えてよいであろう。そこで Table 6b を使って *Essays* と Aarts の比較をすれば *Essays* の英語が現代英語と比較してどのような特徴を持つかを知ることができる。各パーセントは全コーパスに占める比率を示しているのので、例えば *Essays* と Aarts の subject での NP 出現率を比べるなどして互いの特徴を知ることができる。*Essays* は 1597 年、1612 年、1625 年と計 3 版出版され私のコーパスにはその各版のエッセイが入っている。*Essays* はそのように初期近代英語の例なので、Aarts の現代英語との比較という意味もある。

そこでまず subject の位置に出現する NP から検討する。*Essays* では All simple NPs は $29.6 + 30.5 = 60.1$ 、

そして Aarts では $39.8+28.0=67.8$ で 7% ほどの差である。しかし subject に出現する Nouns の欄を見ると、*Essays* では 11.5 で Aarts の 5.5 のほぼ 2 倍である。*Essays* の subject は現代英語の倍の比率で名詞が使われているという特徴を示している。次に Names and pronouns での subject について比べると *Essays* が 18.1 に対して Aarts は 34.3 でこちらは逆である。すなわち *Essays* では主語の位置に名前と代名詞が出現する比率は現代英語の約 2 分の 1 である。これは逆に考えれば、*Essays* では主語位置に意味的に重い名詞が多く出現することを示し、名前や代名詞はあまり出現しないということである。このことは Complex NP の場合を比較するとさらに明確である。All complex NPs の subject を見ると *Essays* の 13.8 に対して Aarts は 6.8 で *Essays* では主語位置には Complex NPs が現代英語の 2 倍出現することがわかる。Multiple modification では 9.1 対 2.7 で *Essays* では現代英語の 3 倍以上の比率で Multiple modification が出現する。これらの比較から *Essays* の主語位置には意味の重い NP が現代英語と比べて高い比率で出現することがわかる。Subject は一般に冒頭に出現することが多いので、*Essays* の文は名詞や複雑な構造の名詞句で始まること示唆している。これに対し現代英語での subject の位置には人名や代名詞が出現する比率が 34.3% と高く Nouns (5.5%) も Multiple modification (2.7%) も非常に低い出現率である。現代英語は主語位置には意味的に軽いものが出現する比率が高いという傾向が現れている。このコントラストは現代の読者が *Essays* を読むときに文から受ける印象に大きなインパクトになるであろう。これは *Essays* が「格言的」(gnomic/aphoristic) と言われることの原因の一つ、すなわちことばの意味内容とは別の言語的な原因であると言えよう。以下の例にその特徴が出ている。意味の重い名詞 (nouns) や Premodified complex NP や Multiple modification が特に主語に出現している—*Iterations*// *no such Gain of Time*/ *Long and Curious Speeches*/ *a Robe or Mantle with a long Traine*/ *a Robe or Mantle with a long Traine*/ *Prefaces, and Passages, and Excusations, and other Speeches of Reference to the Person*—ことが観察できる：

Iterations are commonly losse of Time: But there is no such Gain of Time, as to *iterate* often the State of the Question: For it chaseth away many a Frivolous Speech, as it is comming forth. Long and Curious Speeches, are as fit for Dispatch, as a Robe or Mantle with a long Traine, is for Race. Prefaces, and Passages, and Excusations, and other Speeches of Reference to the Person, are great wasts of Time: And though they seeme to proceed of Modesty, they are Bravery. (XXV. “Of Dispatch” p.77)

繰り返しは一般に時間の損失である。しかし問題の要点をしばしば繰り返すことほど、時間の得になることはない。それは多くのくだらない差し出口を追い払うからである。分かりにくい長話は、裾の長い衣服とか外套とかが競走に向かないように、敏速には不向きである。前置きや挿話や弁解や、その他個人を引合いに出す話は、時間のはなはだしい浪費である。(p.114-15)

Histories make Men Wise; *Poets* Witty; The Mathematicks Subtill; Naturall Philosophy deepe; Morall Grave; Logick and Rhetorick Able to Contend. Abeunt studia in Mores. Nay there is no Stond or Impediment in the Wit, but may be wrought out by Fit Studies: Like as Diseases of the Body, may have Appropriate Exercises. Bowling is good for the Stone and Reines; Shooting for the Lungs and Breast; Gentle Walking for the Stomacke; Riding for the Head; And the like. (L. “Of Studies” pp.153-54)

歴史は人々を賢明にし、詩人[の作品]は才気煥発にし、数学は明敏にし、自然哲学は考え深くし、道徳は厳粛にし、論理学と修辞学は議論好きにする。「学問は性格となる」。それどころか、適切な学問によって除かれないような知能の障害もしくは故障は存在しない。それは身体の病気に適切な運動があるのと同じである。球ころがしは結石と腎臓によく、射撃は肺と胸に、静かな散歩は胃に、乗馬は頭によいなどである。(pp. 219-20)

では次に not subject の場合を見てみよう。Names and pronouns の欄で *Essays* と Aarts は 8.8 : 12.9 である。そして Nouns では 21.0 : 15.1 である。このことは *Essays* では not subject の位置にも意味的に重い

NP が出現する比率が現代英語と比べて高いことを示す。すなわち *Essays* には目的語、補語などの位置にも NP の出現する割合が高いことを表している。たとえば次の引用文中の NP—the **comming on** of Yeares/ the same **Things**/ sudden **Change** in any great point of Diet/ the **rest**/ a **Secret**/ Nature, and State/ thy **Customes**, of Diet, Sleepe, Exercise, Apparell, and the like/ any **Thing**, thou shalt judge hurtfull/ any **Inconvenience** / the **Change**/ **that** which is generally held good, and wholesome/ **that**, which is good particularly, and fit for thine owne Body/ **Houres** of Meat, and of Sleep, and of Exercise/ **one** of the best Precepts of Long lasting—にそのことが現れている：

Discerne of the comming on of Yeares, and thinke not, to doe the same Things still; For Age will not be Defied. Beware of sudden Change in any great point of Diet, and if necessity inforce it, fit the rest to it. For it is a Secret, both in Nature, and State; That it is safer to change Many Things, then one. Examine thy Customes, of Diet, Sleepe, Exercise, Apparell, and the like; And trie in any Thing, thou shalt judge hurtfull, to discontinue it by little and little; But so, as if thou doest finde any Inconvenience by the Change, thou come backe to it againe: For it is hard to distinguish, that which is generally held good, and wholesome, from that, which is good particularly, and fit for thine owne Body. To be free minded, and cheerefully disposed, at Houres of Meat, and of Sleep, and of Exercise, is one of the best Precepts of Long lasting. (XXX. “Of Regiment of Health” p. 100)

老年になるのをしかと弁えて、いつまでも同じことをしようなどと考えないことだ。年には勝てないからである。食事は肝腎な点で急に变えないうように気をつけるがよい。どうしても変えなければならぬ時には、ほかのこともそれに合わせるようにするがよい。一つのことを変えるより、多くのことを変えるほうが安全であるということは、体力においても国家においても秘訣だからである。食事の習慣、睡眠、運動、服装などを検討するがよい。そうして有害だと判断するどんなことでも、少しずつやめるように努めるがよい。しかし変えたために何か不快なことに気づいたならば、また元どおりにするがよい。一般に有益で健康によいとされていることと、各個人に有益であって各人の身体に適していることを区別することは、むづかしいからである。食事や睡眠や運動の時間に、のんびりかまえて快活にしていることは、長生きをする最もよい教えの一つである。(pp.144-45)

8. 結論

文体の性格を知るために NP を利用することについて Aarts はとてもよい実例を示してくれた。本研究はその方法を借用して *Essays* の文体を研究した。Aarts の NP の分析は大変に細かいが、本研究ではその大まかな分析方法を借用している。つまり NP をその文法的構造によって Simple NP か Complex NP かに区分し、つぎにその NP の Simple の程度、Complex の程度によりさらに下位区分する。次に Clause 中でその NP が果たす機能という点から subject と not subject に仕分けする。コーパスが大きいほど信頼性の高い分析結果が得られるのは当然である。Quirk が現代英語の分析に使用した 14 テキストの各々からは約 5,000 語を取っている。そこで私の研究は 7,000 語あまりのコーパスとした。*Essays* のコーパスの分析結果から客観的にその文体の性格を知ることはできないので Aarts の分析を比較の対象に用いた。そこから分かった点は *Essays* には NP の分布状況に特徴があることである。*Essays* では名詞、すなわち代名詞や名前でなく意味的に重い名詞の分布状況に Aarts の調査した現代英語のそれとは大きな違いがあることがわかる。現代英語では特に主語位置には意味の軽い代名詞や人名が出現する比率が高く、意味的に重い名詞句や構造的に複雑な名詞句は主語以外の位置に出現する比率が高い。しかし *Essays* では意味的に重い名詞と構造的に複雑な名詞句の出現率は現代英語の出現率より主語位置でも主語以外の位置でも高い。この点は *Essays* が格言的文体であると言われることの一つの原因、すなわち文法的な原因であると言えよう。

Textbooks:

- Kiernan, Michael. 1985. *Sir Francis Bacon—The Essayes or Counsels, Civill and Morall*. Oxford: Clarendon Press.
 渡辺義雄. 1983. 『ベーコン随想集』 東京: 岩波書店.

Works Cited:

- Aarts, F.G.A.M. 1971. "On the Distribution of Noun-Phrase Types in English Clause-Structure". *Lingua* 26 (1971) 281-293.
 Drabble, Margaret. ed. 1985. *The Oxford Companion to English Literature*. Oxford: Oxford University Press.
 Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
 Ward, Sir A. W., and A. R. Waller. general eds. 1970. *The Cambridge History of English Literature*. 14 vols. Cambridge: Cambridge University Press.

A Study of Noun Phrase Structure and Distribution in Francis Bacon's *Essays*

Keiji Nishioka

*Department of Applied Physics, Faculty of Science, Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received September 30, 2011; accepted November 7, 2011)

The prose style of Francis Bacon's *Essays* is generally termed "aphoristic." No doubt this criticism comes from the many meaningful words dispersed here and there in each essay. My study sprang from an interest in finding out the linguistic cause of the so-called aphoristic style. I focused my attention on the distribution of noun-phrases (hereafter NP) in a clause. I referred to Aarts' (1971) method of analyzing NPs, and compared my result with that of Aarts.

My corpus has 1483 NPs from eight of Bacon's *Essays*. Like Aarts I made a table to show the distribution of each NP according to the grammatical structures, namely, simple NP or complex NP. In addition I examined whether the same NP occurs in the subject position or in the non-subject position in the clause. Thus the completed table has four main categories: simple NP subject, simple NP not-subject, complex NP subject, and complex NP not-subject. I also made the distribution more precise by adding sub-divisions: "Nouns" and "Names and pronouns" under simple NP category, and "Premodified complex NP" and "Multiple modification" under complex NP category. I made a similar table from the Aarts' data as well.

The study of *Essays* NP structure contrasted with Aarts' table reveals that in the *Essays*

heavy NPs occur at a higher rate both in subject and non-subject positions than in the present-day English. This means that modern readers of the *Essays* will meet with structurally complex and significantly meaningful NPs more frequently than when they read present-day English. They will tend to feel the aphoristic nature of such sentences when reading the *Essays*. The aphoristic style of the *Essays* is thus partially explained by the linguistic features of the NPs.